

まむしの三兄弟

牧師 山本 護

田舎住まいも四半世紀、刈り払い機のふり回し方は上達し、山野草をうまくかわしながら草刈りできるようになりました。伝道所の庭や林もそうした慎重な刈り方をするため、時間が余計にかかり、仕上がりは中途半端に見えます。気をつけて残す山野草の代表はテンナンショウ(まむし草)、葉だけの時も間違っただけ刈っちゃうことはありません。

守られてテンナンショウ地回りのごとし、「おっ、まむしの兄弟か」。まむしの兄弟と言えば、1970年代東映のシリーズもの。私は新宿の昭和館で何本か観ています。悪にして義なるハチャメチャな兄弟、政(菅原文太)と勝(川地民夫)が暴れまわるやくざ映画ですが、胸のすく場面でのかけ声や、どっと笑って連帯感が生じていたあの暗闇が懐かしい。



東映のまむしの兄弟は二人ですが、伝道所のそれは三兄弟。聖書世界のまむしの兄弟は誰か、と思ひ巡らしてすぐさま浮かぶのがヘロデ大王の三息子。大王の死後(マタイ 2:19)、三人の息子は彼の地を分割統治します。長男アルケラオは南のユダヤ地方を(マタイ 2:22)、次男ヘロデ・アンティパスは北のガリラヤを(マルコ 6:14)、三男フィリポはガリラヤ湖東岸をそれぞれに統治しました(ルカ 3:1)。

まむしの三兄弟の内、長男のアルケラオはあまりに極悪非道で、ローマ帝国に統治能力なしと見なされて失脚し、代わりに総督ピラトが着任。次男のヘロデは色欲(マルコ 6:17)とそれに伴う近隣国との紛争(政略結婚を反故にしたり)で敗北。三男のフィリポは兄たちに比べれば穏健で、荒廃した都市パネアスをフィリポ・カイサリア(マルコ 8:27)として再建させる行政手腕もありました。まむしの三兄弟の内、長男と次男は内在する自らの毒によって自滅。三男も同じ毒を持つ、まむしだったでしょうが、自家中毒を起こすには至りませんでした。

テンナンショウの根には相当の毒があり、その姿と危険性ゆえに「まむし草」と呼ばれています。草刈りしていて、まむしの三兄弟と対面。はっとしてしばし立ち尽くし、東映やくざ、イエスが生きた時代、そして私たち自身のことへと連想していきました。毒は使い誤ると自滅、うまく使えば人間の可能性を拓けます。悪と義は、罪と恵みは、人間において分かちがたいものなのではないでしょうか。Ω